

日本細菌学会 関東支部ニュース

第9号

日本細菌学会関東支部支部長就任のご挨拶

国立予防衛生研究所
副所長 徳永 徹



去る9月3日、帝京大学で開かれた関東支部評議員会で、次期支部長の選挙が行なわれ、私が選出された旨、木村貞夫現支部長から御連絡を受けました。細菌学会関東支部は、古く輝かしい歴史をもち、現在は会員数1,500名余、支部単独で1つの大きな学会に匹敵する大組織であり、支部長に相応しい先生方も多数おられます。一方私自身は非才の上に、現在煩務を多く抱えているため大変躊躇したのですが、結局お引受けすることにいたしました。この上は、評議員や会員の先生方々のご支援とご協力を得て、支部発展のために微力を尽くしたいと存じます。

私はこれまで細菌学会の本部役員としては、武谷健二、佐々木正五、斎藤和久、三輪谷俊夫の4理事長のもと、すでに10年もの永きにわたり、庶務理事、会計理事あるいは幹事を務めてまいりました。現在は支部担当理事を10カ月務めたところですが、今回支部長に就任ということで、支部間の公平を期するため担当の解任を理事長に申出ております。一方関東支部の方は、これまで比較的御縁が薄く、一学会員として総会などに参加するだけでしたので、支部の事情については余りよくわかりません。しかし木村支部長から種々御教示をいただきましたし、また10月1日に帝京大学で開かれた新旧合同評議員会でも、諸先生方から多くの御示唆を得て、余程理解が深まったように思います。

新評議員のリストは、本号で山口編集長が別に掲載して下さると思いますが、其処にご覧いただけるように御年配の熟達の方、若い気鋭の方、また多方面の分野の方が揃い、誠に心強く思っています。次期の方針や小委員長などは、横浜で開かれる60回支部総会の折に、新評議員にお集まりいただき、具体的に相談をしてから発表したいと思っております。おそらく次期3年の任期の間に、すでに関東支部ニュースなどでも議論されているような「支部例会と支部総会の在り方」「評議員の数・選出方法・役員組織」「支部名誉会員制度」などについて、会員各位の御意見を伺った上で、なんらかの結論を得ることになるかと思っております。合田・木村両支部長の時代に発刊、発展した関東支部ニュースは、是非継続させたいと思っております。実際の事務引継ぎは11月末になるかと思っておりますが、支部会費値上げを含め、木村支部長と現評議員の方々のこれまでの支部発展のための御尽力に衷心より敬意を表し、関東支部の輝かしい歴史に恥じぬ新しい3年であるよう、新評議員の方々と共に努力したいと存じます。

支部長を退任するに当って

木村 貞夫

昭和63年9月合田前支部長の後をついで、支部長に選任されてから今年9月で丸3年が経過しました。

規約により、新しく選ばれた評議員各位の選挙で、徳永徹（国立予防衛生研究所副所長）先生に支部長を引き継ぐことになりました。

何も新しいことも出来ず、前支部長の敷かれたレールに沿って過ぎた3年間でしたが、大過なく任務を全うすることができたのも、評議員の先生方、会員の皆様方のお蔭と心からお礼申しあげる次第です。

ただ一つ心残りは、さきの支部ニュース第8号の議事録にも書いておきましたように支部の財政状態が段々心細くなり、支部会費を値上げせざるを得ない状況になったことです。支部総

会の時に詳しくご説明致しますが、何卒支部の活性化の為に協力をお願いしますよう会員各位にお願い致します次第です。また今回は支部会費のみの値上げで、本部会費については上がりませんので誤解のないよう申しそえます。

次期支部長の徳永先生は免疫の方が専門で細菌とは比較的に縁が薄かったのですが、本部理事もしておられ、学問的にも、政治的にも力のある立派な先生ですので、小生のような老骨と違って、新しい観点から支部の活性化に大いに働いて下さるものと期待しております。新評議員の方々、会員の皆様には新支部長の下で、今後益々関東支部が発展しますようにご協力下さることを、お祈りして退任のご挨拶と致します。

関東支部会員のみなさまへ

支部評議員 本部理事 久恒 和仁

本年6月15日の日本細菌学会理事会（本年度第3回）におきまして、会計担当の高添理事より会計中間報告があり、その中で、現在の日本細菌学会の財政状況が非常に健全な状態であることが報告されました。討議の結果、64年度予算の作製に当って、現行の支部への出費150万円に30万円程度を増額する方向で検討することになりました。その結果、来年度は、当関東支部に対する本部の支出が今年度よりも約14万円ほど増額されることになりました（本年度、第4回理事会）。

私は、3年前から関東支部評議員会の末席をけがすようになりましたが、常に支部予算は緊迫しており、幾つかの大層結構な新しい積極的な支部活動の実行案が提出されましたが、郵送費1～2万円の新しい支出のための予算のめどが立たず、折角のよい提案も、木村（前）支部長の御苦心と努力に拘らず、その多くが陽の目をみることはありませんでした。

これを見るにつけ、古くから“地獄の沙汰も^カ銭次第”という言葉がありますが、学会活動も矢張り“^カ銭”次第か、と誠に残念な思いをして参りました。従って今回の理事会の決定は、関東支部にとりましては、誠に喜ばしいことでもあります。只々、この支部支出増額に対する理事会での討議におきましては、何人かの理事から、支部支出の増額は結構であるにしても、約1,600名の支部会員を擁する関東支部みずからも、積極的に“自力”で支部の収入を増やし財政状態を改善するための努力をすべきである、との厳しい意見・要請が出されました。つきましては、来る11月15日、16日に横浜にて開催されます第60回日本細菌学会関東支部総会の第1日目の総会におきまして、過去15年以上、据えおかれて来ました支部会費（500円）の値上げ（500円）に関する議題が出されるはずであります。ここに支部会員のみなさまの御理解と御協力をお願いする次第であります。

昭和64-66年期日本細菌学会関東支部評議員選挙を終えて

選挙管理委員会委員長 光岡 知足（東大・農）

次期関東支部評議員選挙のため選挙管理委員会(委員：新井俊彦、工藤泰雄、中村明子、光岡知足、山口英世)は下記の予定に基づき昭和63年7月2日から8月1日まで活動しました。

- 7月2日(土)有権者名簿に関する異議申し立て締め切り(必着)
- 7月9日(土)選挙管理委員会において異議申し立てを審議し、その可否を決定する。
- 7月16日(土)訂正部分のみを記した名簿補遺と投票用紙の発送
- 7月29日(金)投票締め切り(必着)
- 7月30日(土)開票、結果を支部長に報告
- 8月1日(月)結果判明次第当選通知を当選者に発送

今回の選挙では、投票用紙発送総数1,511通、うち受取人不明で返送されたもの6通、したがって1,505通が有権者に配布されましたが、総投票数は415通、投票率27.6%ときわめて低率でした。

415通のうち無効投票は11通、有効投票数は404通でしたが、開票の結果は、無効票2票、白票1票でした。

開票得票の結果では、85名の方が得票し、新井俊彦(明治薬大)、池田達夫(帝京大・医)、岡村登(国立公衆衛生院)、金森政人(杏林大・保)、北野繁雄(明海大・歯)、河野恵(東京薬大)、島村忠勝(昭和大・医)、高橋昌巳(聖マリアンナ医大)、鶴純明(防衛医大)、三上襲(千葉大・真核研)(以上五十音順)の10氏が当選されました。先生方には御苦勞をおかけしますが、昭和64-66年期の関東

支部評議員として御活躍下さいますようお願いいたします。なお、得票数の第1位の方は29票を、第10位の方は13票をそれぞれ獲得され、1票だけを獲得された方々は44人にもおよびました。

今回の選挙を終わって残念だったことは投票率が27.6%ときわめて低率であり、前回の投票率36.2%をさらに下廻ったことです。その原因は投票締め切りは7月29日(必着)としたことが充分徹底されなかったことと、そのうえ、締め切りと開票日の間が1日しかなかったため、締め切後に到着したものが91通もあったことにもあると反省させられました。このことを次期の評議員会に申し送り、次回はこの点を改善していただけたらと存じます。なお、締め切後に到着した91通を合わせますと総投票数506票、投票率は33.6%となりますが、それでもなお、前回の投票率36.2%を下廻ります。このことは、日本細菌学会関東支部会員の支部会に対する関心が低下しているとも受けとられ、極めて残念なことです。次期は、ぜひ、会員の皆様が支部会に対し強い関心をもたれ、よりよい支部会に育てていただくことを選挙管理委員長としても希望する次第です。

終わりに、本選挙に当たっては、帝京大学医学部の細菌学教室の木村光子、池田達夫、辻美保、村山琮明、沢田和江の諸先生に支部事務局として、また、久恒和仁評議員(城西大・薬)には開票当日立会人として、大変お世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。

教育・将来計画小委員会の活動について

委員長 川上正也

昭和61年6月に今期の第1回教育委員会が開かれ、活動方針を検討した。すでに全国会で教育講演や技術講習会など、いくつかのカリキュラムが実施されているので、支部会独自の教育活動をどうするかについて議論が交わされ、漸新的なアイデアがいくつも出されたが、いずれも支部会の将来像と連関させながら具体化する必要がある。そこで、この小委員会は教育および将来計画を論じる場にすべきであるという結論になった。

このことが評議員会に提案され、本委員会の名称は、教育・将来計画委員会に変更された。

幸いにして、前期教育委員会(委員長緒方幸雄教授)は、教育計画の資料をうるため、昭和60年7月に、支部会員の主要研究テーマおよび使用菌株についてアンケート調査を行っていたので、今期委員会の作業はその調査票を集計することから始まった。かつて昭和46年に同様の調査が全国会員について行われたことがあるが、それに較べて今回の関東支部の調査では、遺伝学および免疫・感染のテーマの割合が増加し、疫学・予防衛生のテーマがやや減少していることが握まれた。

昭和62年に、この集計を支部ニュースに発表す

ると共に、貴重な調査票を次のように利用していただくよう支部会員が呼びかけることになった。(1)会員がある領域の研究を開始する時に、研究方法や菌株入手経路などに不明の点があれば、支部長または小委員長に連絡する。(2)支部長らは調査票を参考にしてその研究領域の専門家を紹介する。(3)会員はその専門家に直接連絡して技術指導などを受ける。現在までに十数件の問い合わせ(ことに菌株についての質問)があり、専門家をご紹介したので、何らかの形でご利用いただいていると思っている。

その他、教育・将来計画小委員会では関東支部

の将来像、学術集会・研究会のあり方について検討され、次のような問題が提起された。(1)全国会に対応する支部会の教育活動をどのように企画するか。(2)支部会総会が若い会員の修練の場になるよう、総会の雰囲気を変えてはどうか。(3)若い会員が主催する研究会を計画すべきだ——などの提案があった。

委員の方々から出されたこれらの提案を実行しないうちに任期を終えることになってしまい、委員長としてまことに申し訳なく思い、その怠慢をおわびすると共に、次期の委員会に申し送りしたいと思っている。

学術集会小委員会の活動を振り返って

委員長 新井俊彦

支部評議員会の任期も終わろうとしているので、今期の学術集会小委員会の活動をまとめてみることにした。

委員は、河野 恵(東葉大)、北野繁雄(明海大、旧城西齒大)、中村明子(予研)、三上 稷(千葉大)、光岡知足(東大・農)および新井俊彦(明葉大)である。

前の会期の小委員会から引き継いだ業務は、(1)春・秋の支部総会の会長候補者の推薦と会の在り方についての検討、および(2)支部の後援する学術集会の検討と推薦、であった。

最初の小委員会では活動方針全般についての話し合いがおこなわれた。まず、支部総会長の推薦法では、会員教育・研究施設の教授あるいは部長の専門分野別リストを作成することとし、それを評議員に配布して、候補者を推薦して貰い、それを小委員会で取りまとめて候補者を評議員会に推薦することにした。また、学術講演会の後援に関しては、利用状況が良くないので、評議員から会員施設に利用を依頼してもらおうと共に、支部ニュースにも再度紹介して貰うことを希望することにした。

しかし、この活動の利用は、現在でも良くないので、話しはそれるが、この紙面を借りて再度趣旨を紹介したい。会員施設が学術講演会を催す時、その内容が会員の興味に合致し、会を公開して貰える場合、支部会は後援料として金一封(現在一万円)と支部会員に講演会のニュースを通知するハガキ代をお支払いすることになっている。申し込

みは支部会長が受付、一週間くらいで後援を決定できるようになっている。年間6集会后援する予算が準備されている。

この他に、一部の委員からは、技術講習会や特定のトピックの談話会を開催することも提案されたが、技術講習会は本部が行なっていること、談話会は、すでに独自に研究会がつくられて活動しているので、支部の活動として取り上げるのには無理があるのではないかという意見で、様子を見ることにした。

以来、われわれの小委員会はこの方針にしたがって活動してきている。すなわち、支部総会長については、定期的に候補者名簿を追加補充して、評議員に配布し推薦を受け付けて、それを取りまとめたものを評議員会に報告してきた。しかし、任期が進むに従って、ただ推薦者の多い候補を取り上げると、分野が医学系に片寄る可能性が問題になった。そこで、この問題に就いて特別に検討する機会が持たれ、支部評議員、全国評議員のうち関東地区に属する者を医・葉・歯・農の分野に分け、その比率を分野別配分の参考にすることにした。

その結果、新たに支部総会長選考基準に二つの原則を加えることにして、評議員会に報告した。すなわち、(1)評議員会の会期中の6回の総会に分野別の配分を考えることにした。現在の処では、医系(医学部、衛生学部、医系研究所)4回、葉系(葉学部)1回、および歯・農系(歯学部、農学部、農学系研究所)1回が妥当であると考えら

れる。歯学系と農学系は2回の評議員会の会期で配分することになろう。(2)最初に決めた候補者の中で、全国評議員あるいは支部評議員を経験した者を選ぶことにする。幸いにして、今期の評議員会会期中の支部総会長はすべてこれらの条件を充たす方々を選考することができたことを申し添えたい。次に、学術講演会の後援活動であるが、個々の講演会の内容は支部ニュースに報道されてい

る通りである。残念ながら、これは低調で、予算の2分の1以下しか消化されていない。会員各位には学内の講演会をもっと開放して下さるようお願いする次第である。

学術集会を活発にするには、会員の交流を活発にする必要がある。そのためには、学術集会以外の活動にも取り組むべきではなかったかと言うのが、最後にあたっての委員の反省である。

支部ニュース作り 3年間を振り返って

委員長 山口英世

合田支部長の時代に創刊された支部ニュースを引続いて刊行するため、木村支部長の就任とともに小生のほか、工藤泰雄、高橋昌也、野沢龍詞、早津栄蔵、光岡知足、以上6名の支部評議員からなる支部ニュース小委員会が発足した。支部ニュースの充実を今期の支部活動の重点目標の一つにするという支部長の意向を受け、最初の委員会で長い時間をかけて編集方針について討議を行った。その結論として、(1)会員に役立つ情報をできるだけ多く盛り込むこと、しかも(2)読者に無味乾燥と受け取られないような魅力ある紙面作りに努めること、を申し合せた。また、そのためには体裁と内容の両面について改善を計る必要があることも全委員に共通した認識であった。

以後3年間、ほぼ予定通り平均して年2回のペースで、4号から9号まで6回刊行することができた。体裁については、従来のワープロ印刷から本印刷に変わり、第6号からは写真も入るようになって、格段に読みやすくなったと自負している。

一方、内容については、評議員会記録などを必要最小限に留め、支部総会その他会員の身近な関心を惹きつけるテーマについて記事、所感、随筆などのかたちで掲載するよう努めてきた。実際に出来上った4～9号の支部ニュースの内容は、後

に示す通りである。御覧のように、全体的にはまだ試行錯誤の段階にあるが、支部総会に関しては各総会長が開催前と終了後にそれぞれ案内と報告を行うというスタイルはほぼ定着したように思う。さらに、春の総会についていえば、全プログラムを掲載し、別途にプログラムを作成、送付する手間と費用の節約に役立っている。

支部ニュースの発行に当たってのもう1つの大きな問題点は、郵送費をどうするかということであった。当初は支部総会のプログラム発送に便乗して、同封させて貰っていた。しかし、それに頼っていると発刊の時期が制約され、ニュースの新鮮さが失われるおそれがある。幸いにも、その後、評議員会のご理解を得て刊行費の予算を増額して頂き、少くとも年1回は自前で——したがって最適のタイミングで——刊行・発送することができるようになった。

残念なのは、一般会員の方々からの寄稿や意見が一つもなかったことである。これからは新しい小委員会の下で、一層魅力に富む支部ニュースに発展することを心から念願している。

終りに臨んで、毎回の編集にご助力頂いた木村支部長と池田幹事、ならびにお忙しい時間を割いてご執筆下さった多数の方々はこの紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

今期支部ニュース（4号～9号）総目次

第4号（6頁） 1986. 8. 15

- 第55回日本細菌学会関東支部総会報告 総会長 吉川昌之介（東大・医科研）
- 第56回関東支部総会に寄せて 総会長 寺脇良郎（信大・細菌）
- Shayegani 博士を迎えての学術集会 和気朗（予研・細菌部）
- パラチフスBの取り扱い変更について 中村明子（予研・細菌部）
- ミニ情報 (1)命名委員会からのお知らせ 光岡知足（東大・農・実験動物）
- (2)細胞バンクについて 野沢龍詞（順大・細菌）
- 理事会ニュース 理事 光岡知足
- 微生物学協会、IUMSについて 合田朗（北里大・衛生学部）

○支部評議員会記事（第1回，第2回）

○集会案内 第31回ブドウ球菌研究会のお知らせ，第7回理研腸内フローラシンポジウム
「Congress on Bacterial and Parasitic Drug Resistance」

第5号（8頁） 1987. 4. 25

○第57回日本細菌学会関東支部総会を開催するにあたって 総会長 金井興美（予研）

○第57回日本細菌学会関東支部総会のご案内

○第56回日本細菌学会関東支部総会を開催して 総会長 寺脇良郎（信大・細菌）

○わが国における病原微生物検出情報について 工藤泰雄（都衛研）

○日本微生物学協会，I UMS 関係報告 合田朗（北里大・衛生学部）

○“無菌豚”

○支部会員アンケート結果のお知らせ 教育・将来計画小委員会委員長 川上正也

○支部評議員会記録（第3回，第4回，第5回）

○集会案内 第7回財団法人日本ビフィズス菌センター学術集会

○「武谷杯」 日本細菌学会九州支部長 南嶋洋一（宮崎医大・微生物）

第6号（6頁） 1987. 9. 4

○第58回日本細菌学会関東支部総会を開催するにあたって 総会長 緒方幸夫（杏林大・微生物）

○第57回日本細菌学会関東支部総会を開催して 総会長 金井興美（予研）

○日米医学協力研究会コレラ専門部会（通称日米コレラ）22年のあゆみ 神中寛（東邦大・微生物）

○第二回「細菌の病原性とその分子遺伝学」研究会の報告 中谷林太郎（東京医歯大・微生物）

○タイ国立衛生研究所プロジェクトの紹介として 金井興美（予研）

○第三回「細菌の病原性とその分子遺伝学」研究会プログラム

○集会案内 国際フロンティア研究システム・フローラ研究公開フォーラム

○支部評議員会記事（第6回）

第7号（8頁） 1988. 4. 1

○第59回日本細菌学会関東支部総会を開催するにあたって 総会長 黒坂公生（慈恵医大）

○第58回日本細菌学会関東支部総会を開催して 総会長 緒方幸夫（杏林大・微生物）

○光岡知足先生の日本学士院章受賞を祝して 山口英世（東大・応微研）

○歯周病細菌の研究の現状 古賀敏比古（予研・歯科衛生）

○関東支部の運営についての私見 島村忠勝（昭和大・医・細菌）

○私からの提案 高橋昌巳（聖マリアンナ医大・微生物）

○「カビ」の言語学的考察 山口英世（東大・応微研）

○議事録（第7回，第8回評議員会）

第8回（4頁） 1988. 8. 15

○第60回日本細菌学会関東支部総会を開催するにあたって 総会長 秋山武久（北里大・微生物）

○第59回日本細菌学会関東支部総会を開催して 総会長 黒坂公生（慈恵医大）

○集会案内 第17回薬剤耐性菌研究会のお知らせ

○議事録（第10回評議員会）

第9号（8頁） 1988. 11. 1

○日本細菌学会関東支部支部長就任での挨拶 徳永徹（予研）

- 支部長を退任するにあたって 木村貞夫（帝京大・医）
- 関東支部会員のみなさまへ 久恒和仁（城西大・薬）
- 昭和64-66年期日本細菌学会関東支部評議員選挙を終えて 光岡知足（東大・農・実験動物）
- 教育・将来計画小委員会の活動について 川上正也（北里大・医）
- 学術集会小委員会の活動を振り返って 新井俊彦（明治薬大・微生物）
- 支部ニュース作り3年間を振り返って 山口英世（東大・応微研）
- 故神中寛先生を偲んで 久恒和仁（城西大・薬）
- 議事録（新旧評議員会）

故 神中 寛 先生を偲んで

東邦大学医学部微生物学教室 神中 寛教授（前防衛医科大学校細菌学教室 教授）は、去る9月15日、同大学医学部付属病院にて手厚い看護を受けられたのち永眠されました。享年62才でありました。先生は、医学を学ばれた方は御存知の名著“神中整形学”を著された故神中正一博士（当時、九州大学医学部整形外科学教室 教授）の御次男として福岡市にて出生され、旧制福岡高等学校理科乙類を経て九州大学医学部を卒業後、故戸田忠雄先生が主宰された同細菌学教室に入局され、細菌学と免疫学を専攻されました。当関東支部会員になられたのは、所沢市の防衛医科大学校へ赴任された昭和50年4月からであります。先生は関東支部評議員をつとめられ（昭和58年～60年）、その間に第54回関東支部総会（昭和60年 秋）を支部総会長として主宰されました。

先生が防衛医科大学へ赴任される直前の九州大学は、米空母エンタープライズ佐世保寄港反対と米軍戦闘機のキャンパス内校舎屋上への墜落に端を発した学園紛争がまだ終りを告げておらず、当時の故武谷健二医学部長（のちの九大学長）は、輸液をしながら紛争の学生と交渉を行うほどの緊迫した情勢が続いており、医学部の壁新聞その他に、デカデカと学部長の教室員である神中先生の防衛医大への赴任反対のピラが貼り出されておりました。

この反対のさなか、先生は関東へ移られ、コレラに関する研究を続行されるとともに、日米医学協力研究計画日本側コレラ専門部会の実際上の事務局長として、歴代の部会長（福見秀雄、武谷健二、桑原章吾、大友信也の諸先生）を助け、精力的に活動されました。しかも、特筆すべきことは、防衛医科大学に籍をおかれる立場からの慎重な配慮

城西大・薬・微生物、教授 久 恒 和 仁

のためか、公的には、同コレラ専門部会のパネルメンバー（部会員）はおろか、日本側20名の研究員としても一切その名を連ねることなく、たゞ全くの陰の縁の下の支えとなって儘力され部会を支えて来られたことであります。この先生の貢献なくば、日米文化交流史上、最大の成果の一つといわれる日米医学協力研究計画のいくつかの専門部会のうちでも抜きんでてその成果を挙げ、現在も見事に発展しつつあるコレラ専門部会の今日ではなかった、と断言してよいと信じられます。昨年の1月、先生は防衛医科大学から東邦大学医学部へ移られ、さらに同年の4月には日米医学協力研究会日本側コレラ専門部会部会長に就任されました。多くの人々の期待を荷って、これからが先生の力をあますところなく充分に発揮して、部会長として世界のコレラ研究発展のために存分に活躍できる、というその矢先き、天は非情にも先生をわれわれから奪ってしまいました。悲しみというよりは、まさに無念というほかありません。

想えば、昭和22年、旧制福岡高等学校理科乙類へ入学して1年生の時に文化祭の御指導をお願いして以来、九大在学中、九大医学部細菌学教室助手時代、また先生と時を同じくしてこの関東へ移って来ましてからも日米医学協力研究会コレラ専門部会研究員の一人としましても、実に41年の永きに亘って先生の不肖の後輩としてお世話になり続けて参りました。いま、その先生を失った言葉につくせない大きな悲しみに耐えて、こゝに只管、先生の御冥福をお祈りする次第であります。

どうか、先生が生前こよなく愛された、會津八一の歌集「鹿鳴集」にうたわれた、あの御佛のやさしい腕にいだかれて、安らかにお眠り下さいませよう。

議 事 録

・新旧合同評議員会

日時：昭和63年10月1日(土) 15:30~17:30

場所：帝京大学病院本館2階第一会議室

出席者：秋山(第60回支部総会長), 新井, 五十嵐, 池田, 岡村, 河西(第61回支部総会長), 川上, 北野, 木村(支部長), 工藤, 河野, 島田(新幹事), 島村, 高橋, 徳永(新支部長), 野沢, 久恒, 山口, 木村(光)(幹事代行)

欠席者：金森, 笹川, 鶴, 中村, 早津, 平山, 三上, 光岡

議題：

1. 第60回支部総会準備状況(秋山総会長)

開催日：昭和63年11月15日(火), 16日(水)。

場所：神奈川県立県民ホール。一般演題(50題)は2会場で行なう。1題につき演説時間12分, 討論3分。

2. 第61回支部総会準備状況(河西総会長)

開催日：昭和64年6月3日(土)。

場所：昭和大学薬学部上條講堂。

シンポジウム2題, 特別講演1題および教育講演1題の予定。詳細は日細誌 Vol. 44(1)に掲載予定。

3. 昭和63年度決算報告, 昭和64年度予算案審議について

昭和63年度決算報告：別紙の通り支部長より報

告された。会計監査は新井, 早津両評議員にお願いした。昭和64年度予算案：別紙の通り, 支部会費値上げした場合および値上げしない場合の予算案について支部長より報告され, 支部会費の値上げの必要性が全員によって承認された。

4. 選挙管理委員会報告

光岡選挙管理委員長欠席のため, 木村支部長が代理で別紙の通り, 開票結果および会計決算を報告した。

5. 支部長および各小委員会の申し送り事項

学術・集会小委員会(新井委員長)：3年間の活動報告を支部ニュースに掲載した。

教育・将来計画小委員会(川上委員長)：支部会のなかでの教育の在り方, 学術集会・研究会の在り方, 若い会員の技術研修会などの在り方について検討した。結論が出なかったので申し送り事項とした。

支部ニュース小委員会(山口委員長)：支部ニュース4~9号を発行した。アナウンスの点では読者に役立ったと考えられるが, どちらかというと一方通行の面があった。次回からの支部ニュースは, 若い会員が気楽に投稿できるような編集方針でのぞまれることを申し送り事項とする。

6. その他

昭和63年度決算は新井, 早津両評議員により10月1日に監査を受け承認された。

◇編集後記◇

△…選挙も無事に済んで新しい評議員の顔ぶれが決まり, 支部長も木村先生(帝京大)から徳永先生(予研)へとバトンタッチされました。若さと抱負あふれる新評議員会に大きな声援をおくりましょう。

△…本号は今期最終号ですので, 新旧支部長のご挨拶に加えて, 4つの小委員会の活動状況を各委員長より総括して頂きました。この3年間どうぞ苦労様でした。

△…神中寛先生(東邦大), 江田亨先生(帝京大), など働き盛りの会員の訃報が多い年でもありました。皆様には呉々も健康管理にご留意頂きたいと思います。

△…手探りで支部ニュースづくりをやってきたこの3年は, 過ぎてみればあっという間でした。こ

れも編集子が年をとってきたせいでしょうか。次号からはフレッシュな感覚の紙面が拜見できるものと楽しみにしております。

日本細菌学会
関東支部ニュース
第9号
(1988. 11. 1)

編集・発行：日本細菌学会関東支部
〒173 東京都板橋区加賀2-11-1
帝京大学医学部細菌学教室
☎ 03-964-1211